九〇〇号記念誌上展出品要項

≪一般部≫

一、同人・準同人・支部長・推薦

賛助出品とし、出品者全員の作品を掲載します。

・作品サイズ　毛筆作品で半切以下縦横自由

・賛助出品料　同人・準同人　一〇、〇〇〇円
　支部長　七、〇〇〇円
　推薦　五、〇〇〇円

※推薦…漢字・随意・かな、いずれかの部門での合格者一人一点まで

・申込締切　11月22日（金）

九月号に同封の「九〇〇号記念誌上展」賛助出品申込書に、氏名・資格・作品縦横サイズを記入の上ご提出ください。

・出品締切　12月10日（火）

① 賛助出品作品

② 「九〇〇号記念誌上展」賛助出品票（1作品に1枚）

③ 九月号に同封の「九〇〇号記念誌上展　賛助出品取りまとめ表」に人数・金額・送金方法を記入する。

以上①②③をまとめて期日までに送付してください。

二、一般毛筆部・硬筆部の特別昇試とします。

・出品資格　毛筆部　準推薦～八級
　硬筆部　正教授～八級

◎毛筆部推薦合格者で他部門が準推薦以下の方も受験可

・昇試参考課題は十一月号掲載（12月20日締切課題）

※硬筆部は秋季昇試・創作部門（11月22日締切）も実施します。

・出品規定　十一月号掲載の参考課題の他、過去の課題や自由課題での受験可（各部門ごとの文字数等の原則あり。通常の定期昇級試験に準ずる）。

〔例〕第一部漢字…条幅に漢詩十四字　第一部かな…条幅に短歌

・受験料　定期昇級試験受験料と同額（裏表紙参照）

・申込書　十一月号に同封

・提出締切　12月20日（金）必着

・合格発表　令和七年二月号＝九〇〇号記念誌上展

・特典　①記念展として優秀作品に賞を授与します。
　②毛筆部の師範以下、硬筆部の特選以下の受験者は一ランク以上昇格。

※毛筆部正教授以上、硬筆部師範格以上は優秀作のみ昇格。

三、漢字かな交じりの書

資格に関係なくどなたでも出品できます。優秀作品掲載。

・参考課題　ほんとうに静謐なものは永遠である
（ピエール・ルヴェルディのことば）

※この課題の他、自由に選んだ課題可。

・サイズ　半紙　縦横自由　・出品料　五五〇円

・提出締切　12月20日（金）必着

四、一字書

資格に関係なくどなたでも出品できます。優秀作品掲載。

・課題　自由

・サイズ　半紙　縦横自由　・出品料　四四〇円

・提出締切　12月20日（金）必着

五、誌代増頁分

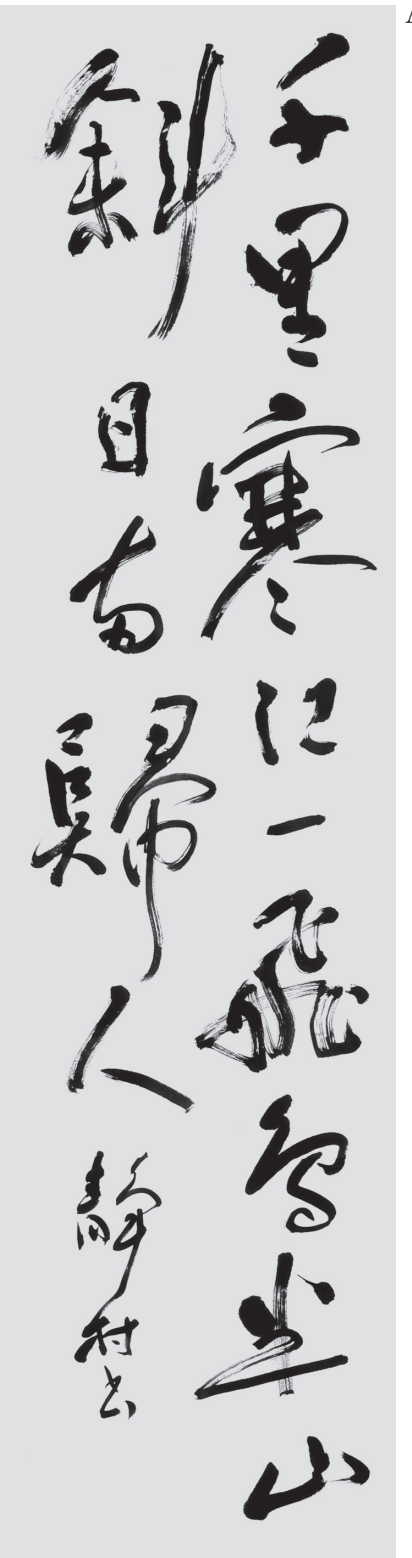
一般会員のみ、増頁分として別途五〇〇円お納め願います。

六、授賞式は令和7年6月1日（日）に予定しています。

九〇〇号特別昇試第一部漢字参考課題　（12月20日締切）

※この課題の他、十四字の漢詩を自由に選んでも良い（過去の課題も可）。

A



鈴木静村先生書

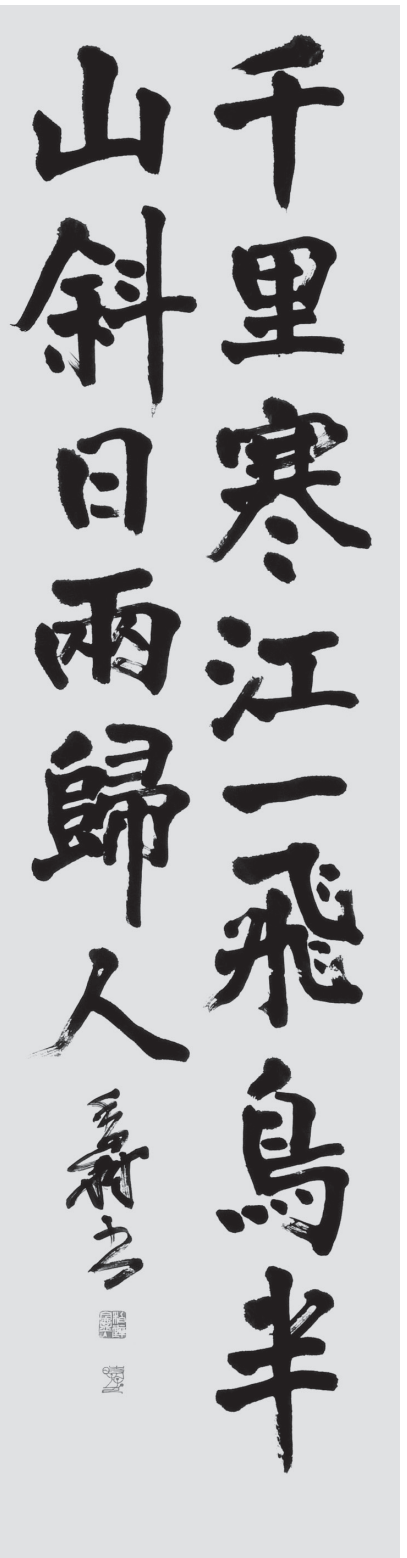
千里寒江一飛鳥　半山斜日兩歸人（楊厓）

千里の寒江一飛の鳥、半山の斜日兩歸の人。

「字幅」をとるということは、字内部に空気を入れ、懐（ふところ）を大きく、手足を外に張り出すことです。文字の大小、字幅、重心など、狙いを決めて草稿づくりに導入しましょう。**千**　一画目の入筆、バネで左へかっぱじく。**里**　頭部に空気、末画は離す。**飛**　転折では筆を挫く。**鳥**　前傾姿態。**山**　平たく。**斜**　偏、旁の傾きで締める。**日**　小さくても線に味。**帰**　一画目の傾きが大切。末画は「斜」の末画と変化。**人**　二つの画の傾き、特に右払い。

髙橋香樹会長書

B



今回は、楷書です。一年に一・二回は楷書をと思っていたのですが、唐代の楷書は書いていると苦しくなってきます。そこで、少し気楽に書ける楷書をと思い、鄭道昭を書き始めたのが、もう十年以上になります。鄭道昭は緊張感なく書けるような気がしました。今は、鄭道昭を意識しなくても気楽に書けています。

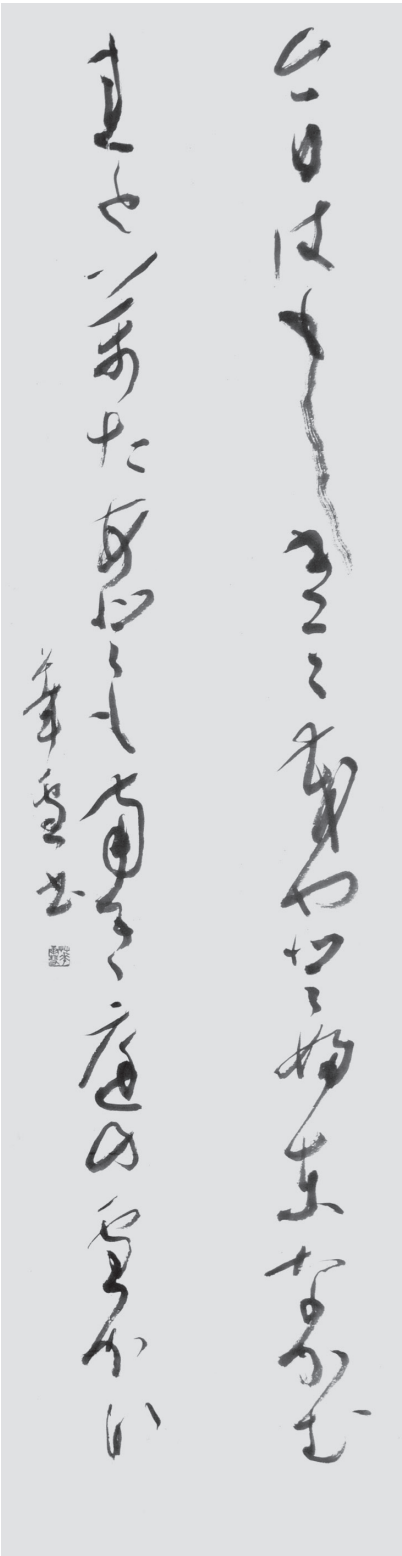
訳…広々とした冬の江に一羽の鳥が飛んでゆき、夕日がさす山の半ばをふたりの人が帰ってゆく。

予告（一月二十二日締切）　**我醉欲眠卿且去　明朝有意抱琴來（李白）**

九〇〇号特別昇試第一部かな参考課題　（12月20日締切）

※この課題の他、和歌を自由に選んでも良い（過去の課題も可）。

A

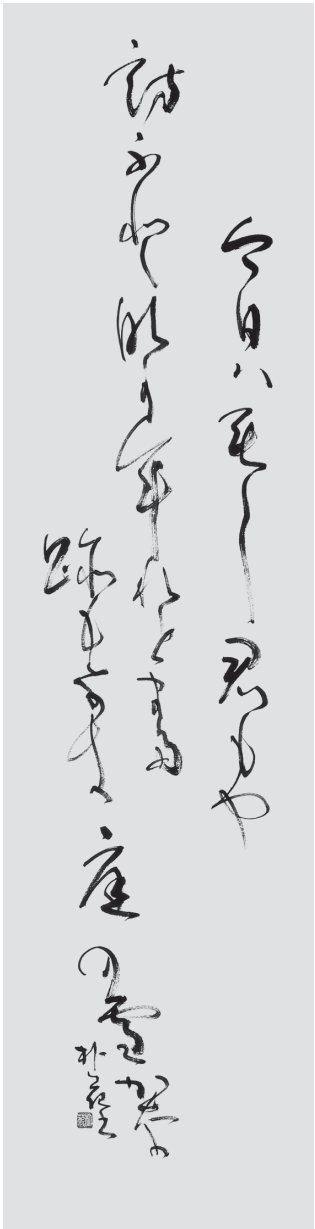


平岡華雪先生書

けふはもし君もや訪ふとながむれどまだ跡もなき庭の雪哉（新古今和歌集　皇太后宮大夫俊成）

今日はもしき三茂や登婦東ながむ連と萬たあ登も南き庭の雪か那

B



向山朴花先生書

今日八毛し君もや訪ふ登那可牟れとま多跡も奈支庭の雪か奈

藤原俊成の和歌

皇太后宮大夫俊成は、平安後期から鎌倉初期の公家、歌人。歌風は格調高く深みのある余情美を特徴とし、古歌や物語の情景、心情を歌に映し、奥行きの深い情趣を表現。歌道から、能楽、茶道をはじめ、日本芸能に影響を与えた。又門下からは、息子定家をはじめ多くの優秀な歌人を輩出、指導者としても新古今歌風形成に大きな役割を果たした。

学び方

歌意…今日は君が来るかと思って眺めていたが、庭に積もる雪にまだ足跡がないなあ。

歌の情景、情感が語りかけるように伝わり、構成に試行をくり返しました。

・三行構成は、句またがりで高低差をつけてみる。・左右隣り合う行間は、文字の位置と大小の調和をはかる。・文字の濃淡により、奥行きを表出してみる。・同じ仮名文字は、使いなれない変体仮名にせず、線と形を替えてみる。これ等を配慮してみました。

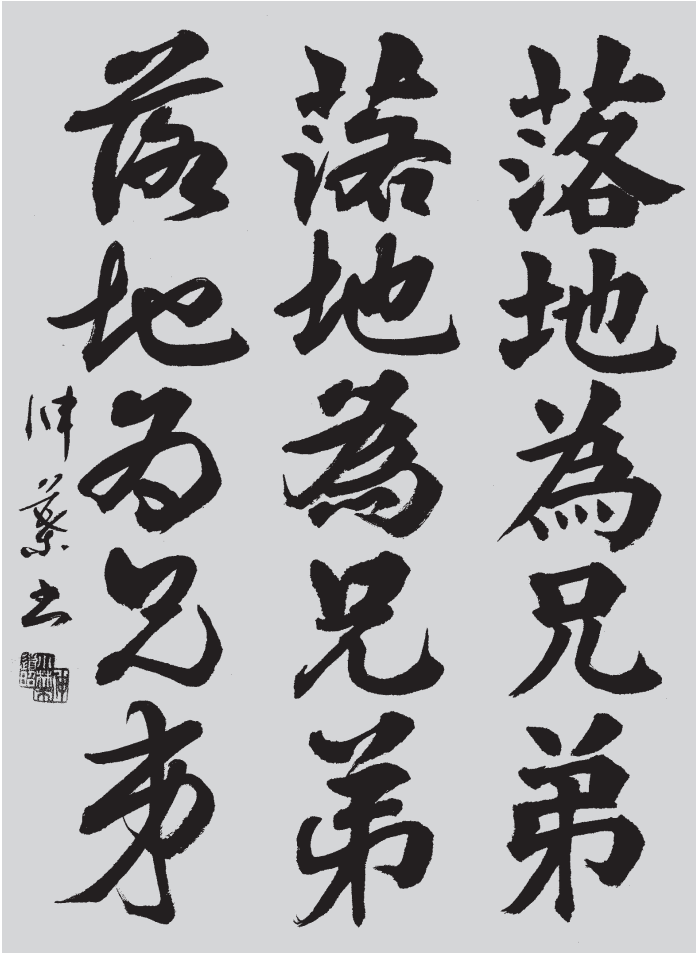
手本に従って何枚か書いているうちに、ふと浮かんだ文字に替えてみたり、自分流の散らし方に替えてみると、思いがけぬ良い作品を生み出すきっかけになると思います。

予告（一月二十二日締切）　**ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり**（源　宗于）

900号特別昇試第二部漢字参考課題　（12月20日締切）

小林伸葉先生書

落地爲兄弟（陶淵明）　地に落ちて兄弟と為る



訳…そんなこの世に生まれ出たからには、すべての人が兄弟のようなもの。

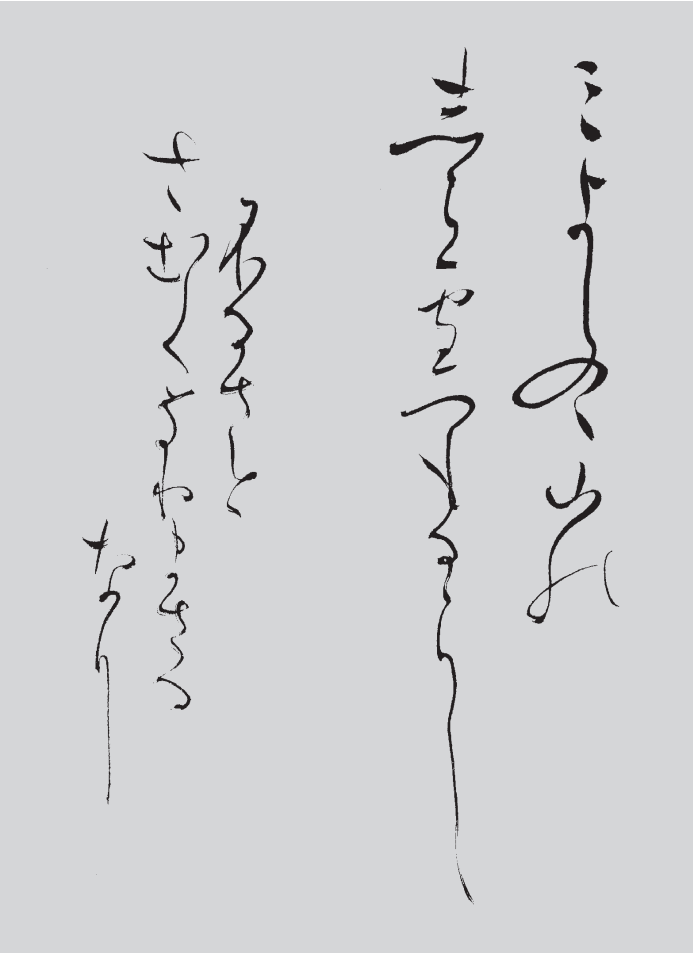
※漢詩五文字（三体　楷行草）を自由に選んでも良い（過去の課題も可）。

900号特別昇試第二部かな参考課題　（12月20日締切）

高塚竹堂先生書

みよしのの山の白雪つもるらし古里さむく成りまさるなり（古今和歌集　坂上是則）

三よしの、山能志ら雪つもるらし不るさとさむく奈利末さるなり



※和歌を自由に選んでも良い（過去の課題も可）。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

900号特別昇試第三部漢字参考課題　（12月20日締切）

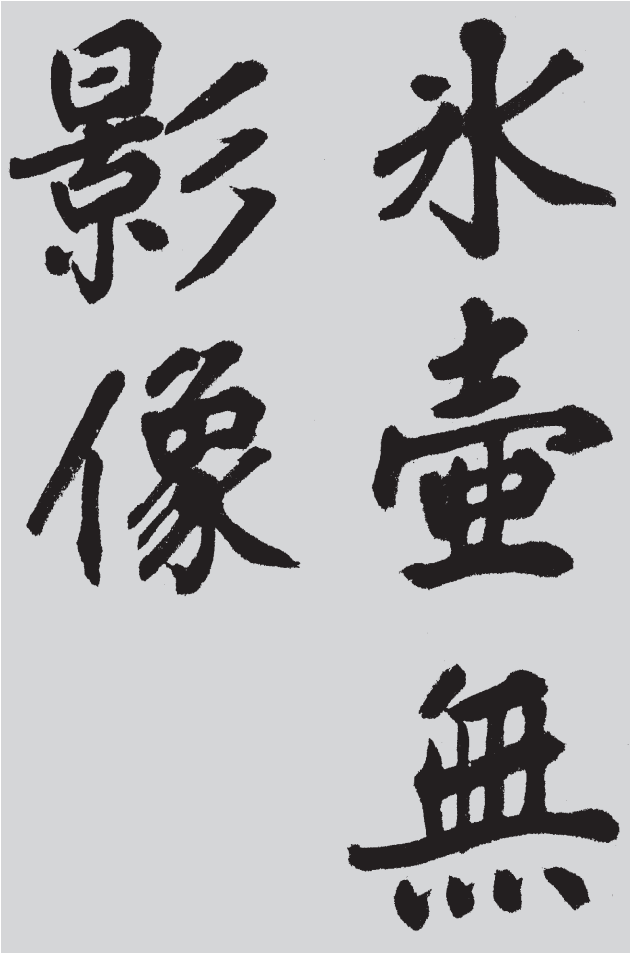
平岡華雪先生書

氷壺影像無し。（槐安國語）

訳…すきとおって影なし。心中一点の暗影なし。

〈一文字の〆〉

終末部分の用筆は大切です。「氷」の右払い、「壺」の横画、「無」の連火、「影」のさんづくり、「像」の右払い等、用筆が甘くならないよう留意のこと。



（1月22日締切）　疾風知勁草（王覇伝）

※漢詩五文字を自由に選んでも良い（過去の課題も可）。

900号特別昇試第三部かな参考課題　（12月20日締切）

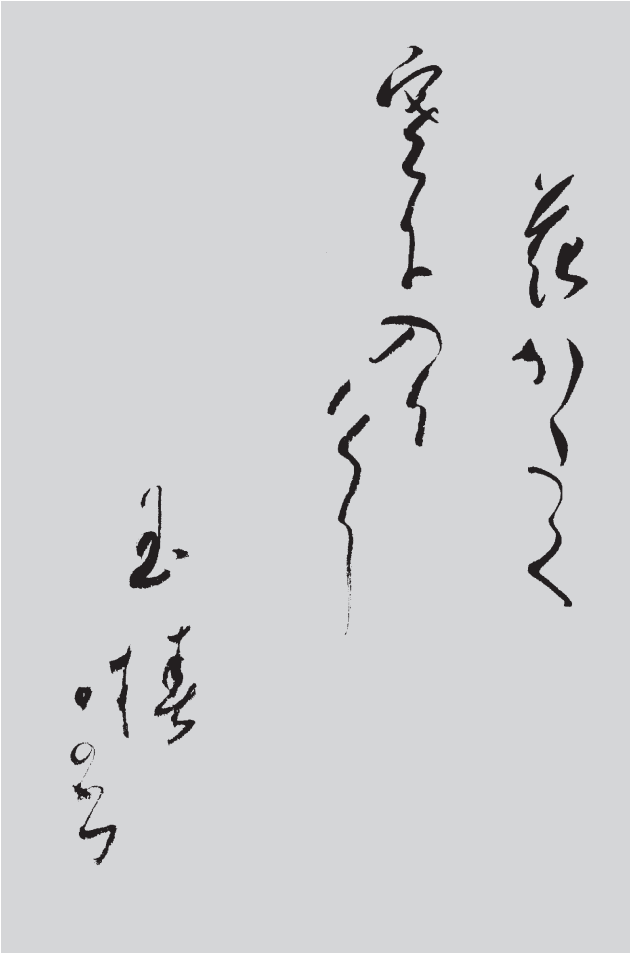
平岡華雪先生書

花かたく寒に入りけり玉椿（冥々）

花か多久寒尓入り介り玉椿

〈基礎的な用筆のこと〉

「か多久」、「か」の末筆からのつづけ方は基礎的用筆の一つ、〝速さ〟と〝抑揚〟をどう導入するか。これがポイントです。



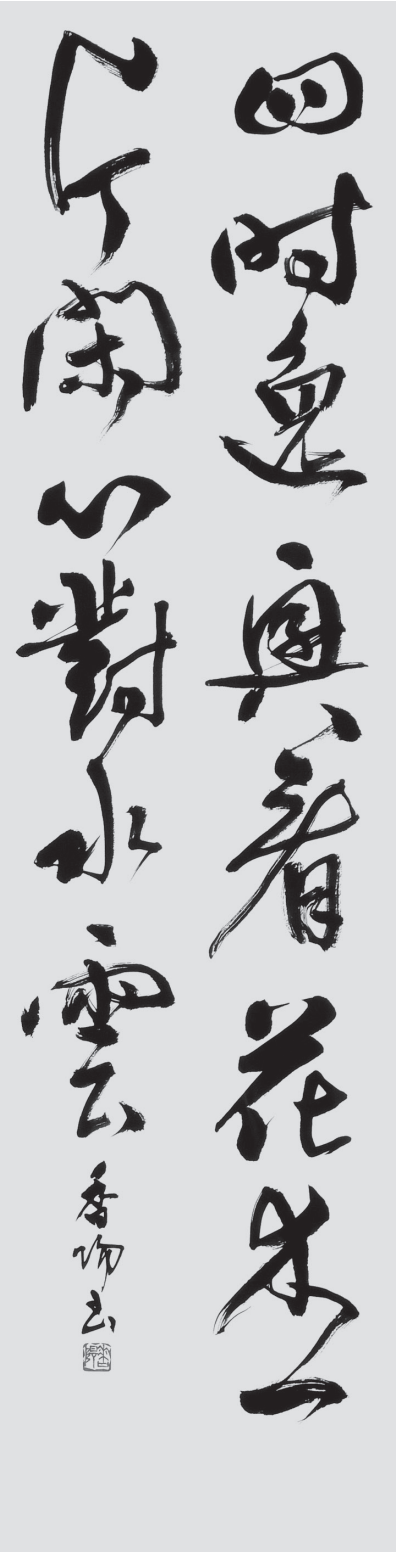
（1月22日締切）　枯野ゆく人や小さう見ゆるまで（千代尼）

※俳句を自由に選んでも良い（過去の課題も可）。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

九〇〇号特別昇試随意参考

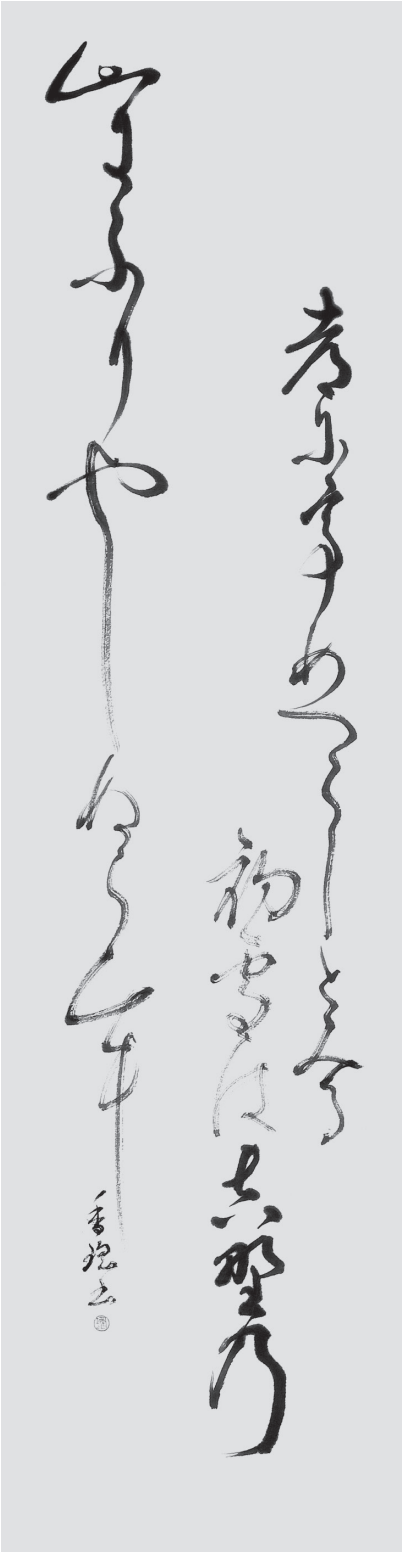
福田香陽先生書



四時逸興看花木　一片閑心對水雲（周明新）
四時の逸興花木を看、一片の閑心水雲に対す

訳…春夏秋冬のすぐれた興趣は花やもみじを見るに在る。ただ一片の清閑なる心は水村の雲などにむかうのにふさわしい。

内藤香瑶先生書



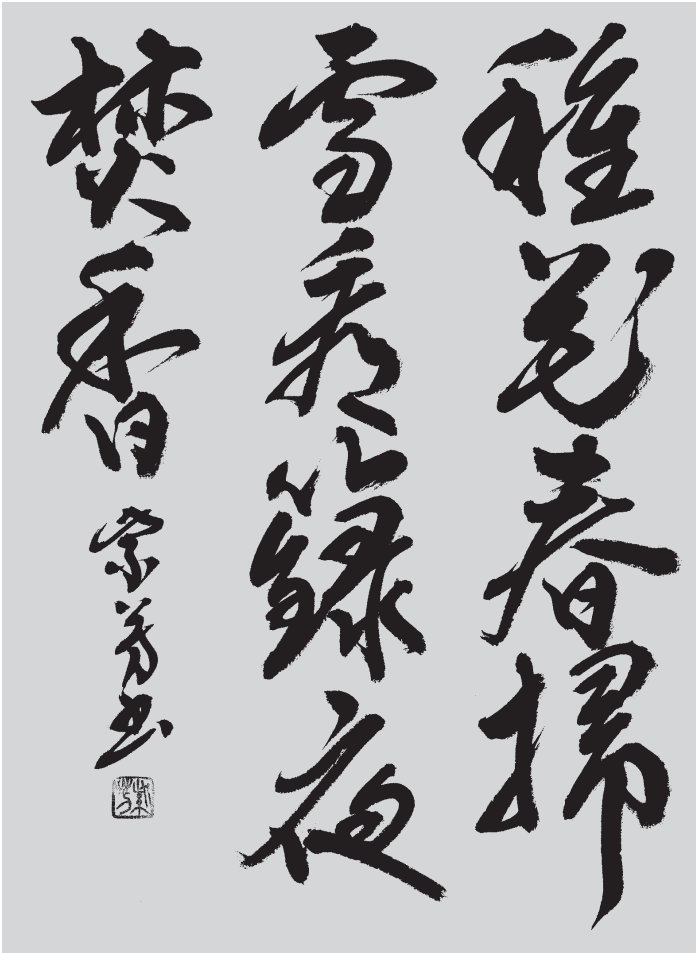
都にてめづらしとみる初雪は吉野の山にふりやしぬらむ（源景明）
都尓帝めつらしとみる初雪は吉野乃山尓ふりやしぬら牟

歌意…都では珍しいと思って見る初雪であるが、山深いところとして知られる吉野の山では、もうすでに雪の降るのもこと旧り、珍しくもなくなったことであろうなあ。

◆注　意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

九〇〇号特別昇試随意参考

高橋紫芳先生書

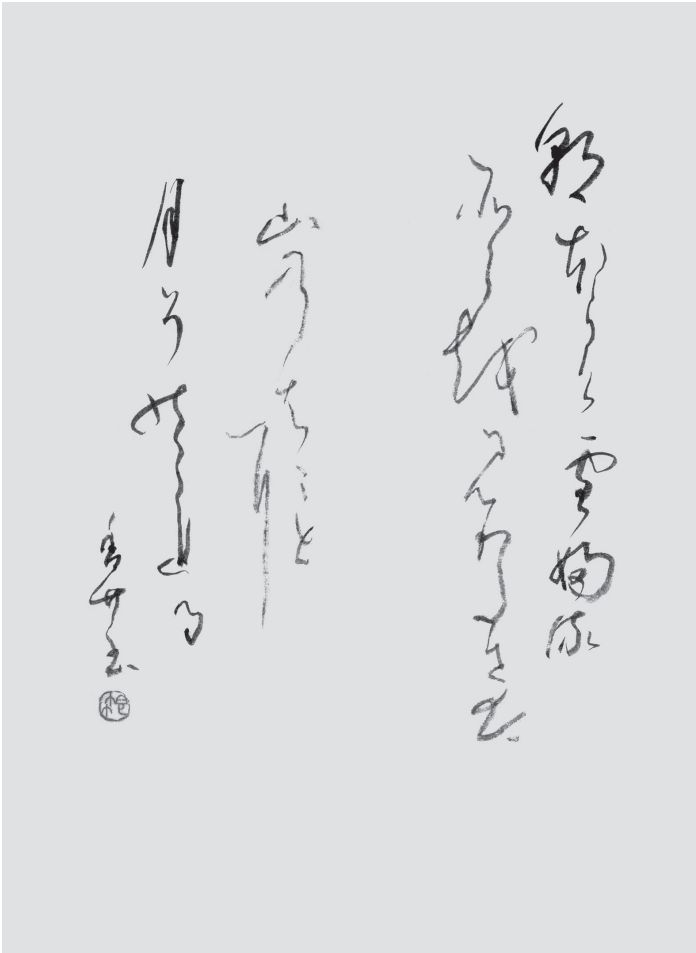


種花春掃雪　看籙夜焚香（陳眉公）
花を種えて春雪を掃い、籙を看て夜香を焚く。

訳…花咲く木を植えて春に雪を掃ってやしない、未来記を読んでは夜に香をたくのである。

九〇〇号特別昇試随意参考

青柳香竹先生書



朝ぼらけ雪ふる空を見わたせば山のはごとに月ぞ残れる（源道済）
朝本ら介雪婦流所ら越見わ多世盤山乃者こと耳月曽能こ連る

歌意…夜がほのかにあけ初めて来る頃、雪の降る空を見わたすと、山の端ごとに、有明月がまだ残っているかのように、明るく見えることだ。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部九〇〇号特別昇試参考課題　（12月20日締切）

赤木典子先生書　　石原春香先生書

正教授合格者　創作部門（自運作品、自由形式）で出品。

昇試参考課題２　（初段格以下）

昇試参考課題１　（師範以下初段以上）

※この課題の他、自由に選んでも良い（過去の課題も可）。

十二月は春にもまさって庭に小鳥の声の最も賑う時節である。簪の玉のような白い花の咲く八ツ手の葉陰には藪鶯が笹啼している。

世の中に有る人、事業繁き物なれば、心に思ふ事を、見る物、聞く物に付けて、言ひ出だせるなり。

昇試参考課題１（初段以上）

十二月は春にもまさって庭に小鳥の声の最も賑（にぎわ）う時節である。簪（かんざし）の玉のような白い花の咲く八ツ手（やつで）の葉陰には藪鶯（やぶうぐいす）が笹啼（ささなき）している。

（『写況雑記』永井荷風）

昇試参考課題２（初段格以下）

世（よ）の中（なか）に有（あ）る人、事業繁（ことわざしげ）き物（もの）なれば、心に思ふ事を、見る物、聞く物に付けて、言ひ出（い）だせるなり。

（『古今和歌集』仮名序より）

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。

(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。

(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新

(4)

(5) 受験料は一、〇二〇円